「ウッドスタート」で
子どもの未来と日本のくらしを考える。

第3回

木育サミット2016

実施報告書

2016.3.11［金］**10:00〜16:30** レザンホール（塩尻市文化会館）

主催：認定NPO法人日本グッド・トイ委員会/東京おもちゃ美術館
共催：塩尻市・塩尻商工会議所・木育フェスティバル実行委員会
後援：長野県、abn長野朝日放送株式会社

林野庁補助事業

東京おもちゃ美術館

❖ 基調講演：「今後の木育に期待すること」

【これまでの木育のあゆみ】

平成16年に北海道で誕生。・平成17年には木づかい運動がはじまった。

●平成18年に森林林業基本計画で「木育」がはじめて記載・やや難しい文章だが、概ね以下のようなことを基本計画の中で木育と定義した。

・木材に対する親しみや木の文化の理解を深めること

・多様な関係者が連携し木材の良さ・利用の意義を学ぶこと

●官は「応援」の役割

・国・都道府県・企業・NPOなどの多様なプレーヤーが木育を推進するなかで、官は企業やNPOが行う木育の場づくりや新米パパママ支援などの活動を応援するのが役割と考えている。

・新生児のウッドスタート／幼児の木育キャラバン／児童の木育プログラム／成人の森のおはなし会

・あそぶ／触れる・感じる／体験する／学ぶ

●全国各地で木育普及の活動

・埼玉：県と大学の連携協定・岐阜：木育30年ビジョン・兵庫：大人への木工教室・熊本：木育指導員の育成

【今後の木育に期待すること】

【木育は第2ステージに】

●地方創生の中で

・森林蓄積を考えるとまさに今が活用するべき時期に来ている。

・産業的な観点では木材需要を喚起し、雇用的な観点では国産材の安定供給を進めることにより、林業を成長産業化したい。

●新国立競技場でも日本の木が大きく取り入れられるデザインに

・2020年の東京オリンピックは『日本は木の国』ということをPRする絶好の機会と考えている。

・先日も建築家の隈研吾さんとお話しした際に、今後はコンクリートから木へのシフトが進んでいくのではないかという印象を持った。

●木育とは何かについてあらためて見つめ直す時期

・多様な木育を認め合い、互いに連携し、さらに前進することを期待したい。

・国民全体で木の良さ・木材利用の意義を共有して頂きたい。

❖ ウッドスタート宣言市町村 紹介

【塩尻市・小口市長】

●日本の中心に位置する塩尻市で、木育サミット初の地方開催をすることができたことは意義深いと考えている。

●塩尻市も山林に恵まれた地域であるが、木材の活用の途が多くはなかった。

●子どものころから植樹を行ない、大人になってチェーンソーを持つなど、まさに森林業は身近なものであった。

●塩尻市は平成25年にウッドスタート宣言を行い、誕生祝品としての木育おもちゃ製作も市内で行っている。

【信濃町・和田副町長】

●信濃町は野尻湖とナウマンゾウで有名な町。

●本年度にウッドスタート宣言を行い、今年の3月29日子育てサロンのオープンと誕生祝品の贈呈式を予定している。

【秩父市・久喜市長】

●平成26年度にウッドスタート宣言を行った。秩父銘仙を活かしたおもちゃを作り市民に渡している。

【東御市・花岡市長】

●東御市では保育園統合を行うタイミングに差しかかっており、今後ますます自然保育・木育を推進していきたい。

【木曽町・原町長】

●木曽町は御嶽山を有する木曽路の中心部に位置する町。木曽馬の保存も行っている。

●御嶽山の噴火からの復興をまさに進めており、産業・観光復興に加え、子育て支援にも力を入れている。木育推進もその一つと考えている。

【大桑村・貴舟村長】

●大桑村は95％以上が森林の村であるが、木材を有効に活用できていない。

●アルプスホルンや木曽三味線の産地としてぜひご記憶頂きたい。

❖ 特別講演：「心に木を植える」

イギリス南ウェールズ生まれ

●産業革命以降鉄で栄えた町であり、一時は森林率が5％程度にまで減少した。しかし、その後森林から木がなくなったことで地滑りや鉄砲水などの災害が続いたことをきっかけに森林資源の再生に努め、現在は森林率が60％程度にまで回復した。

●1962年に来日し、当初は日本の格闘技を学ぶことが目的であったが、日本の自然の美しさに心を奪われた。その後世界でネイチャーガイドなどの活動を行っていたが、日本の黒姫の自然にほれ込み、この地で生きていくことを決めた。

●自身と黒姫の方とたった二人で荒廃した森林に光を取り戻す取り組みを開始し、同時に少しずつ森林を購入し、アファンの森と名付けた。森林管理はアファンの森だけでなく近接する国有林にもおよび、範囲は広がっている。

●木材の搬送には、森林を傷つけない『馬搬』が最も良いと考えており、アファンの森で実践している。

宮城の震災復興に取り組む

●2011年の3月11日には大分の湯布院で震災の報に触れた。

●宮城県の松島の方から助けてほしいと頼まれ、アファンの森に子どもたちを招待した。

●安全な場所で子どもたちに笑顔が戻ると大人の顔にも笑顔が戻る。

●そのときに、松島の小学校校舎の再建築に対する支援を依頼された。

●鉄筋コンクリートの校舎ではなく木造にすることを条件に引き受けたが、行政との折衝は困難を極めた。

●木造の校舎にはかぜ（インフルエンザなど）やアレルギーの抑制効果があると考えられている。

●同時に学校の裏山を明るい森林にすることにも努めている。

森の力で子どもの成長を

●森は教育の場所。子どもが荒れるのは環境汚染に原因があると永年考えられてきたが、子どもが自然の中にいない上にテレビ漬けになっているために脳の発達に悪影響を及ぼしている（自然欠乏症）ことが原因ではないかと考えている。

●これだけの森が日本にあるにも関わらず、自然を知らない子どもが増えているのは非常に問題であり、子どもを森へ戻すような活動をこれからも行っていきたい。

ワークショップセッション

01 森から考える子どもたちの未来・日本の未来

C.W.ニコル（作家・ナチュラリスト）、稲本 正（オークヴィレッジ株式会社会長）
村松 亜希子（生態計画研究所主任研究員）
コーディネーター:馬場 清（NPO法人日本グッド・トイ委員会事務局長）

本分科会では、ニコルさんの基調講演を受けて、稲本正さん、村松亜希子さんという2人のナチュラリストを迎えて、ディスカッションを行った。前半では、森での活動、木の取組が子どもたち、特にいろいろな問題を抱えている子どもたちにどんな影響を与えるかについて、豊富な事例が語られた。「自然欠乏症」の子どもたちだからこそ、森での体験や木と接することが必要と一同、納得。引き続き後半では、自然がほとんどない都市での「木育」のあり方について議論した。身近にある自然を通して、あるいは木のおもちゃを通して、さまざまな「自然」体験ができるように大人も工夫しなければならない。そのことを通して、社会が持続可能になっていくためのくらしのあり方について、子どもだけでなくすべての人びとが考えるようなそんな社会になっていくことが、木育にとって大切だと言うことが明らかになった。

02 かんなのことは俺たちに語らせろ！～木を大切に削るコツ～

長野県上松技術専門校 校長 上條 勝
島根大学 名誉教授 山下 晃功

鉋博士・山下名誉教授が、鉋４大文化圏のヨーロッパ式・アメリカ式・中国式・日本式のかんなを前に違いを説明した。日本は唯一、かんなを手前に引いて削る方式で、その訳は日本が立ち作業ではなく座式中心で進んだ歴史によるものと考えられている。また、日本の木造建築は、かんなの仕上げを持って最終仕上げとしてきた文化があり、かんな作業の後、塗装を施すことが多い諸外国と異なった。
実演は削ろう会会長上條校長が日本式の鉋（刃幅75㎜）を用いて厚さ1/100㎜以下の鉋削りを長さ2mの天然木曽檜で披露し、参加者にも体験してもらった。他に、槍鉋（文化財復元等に使用）・幅六寸（18㎝）の大鉋（伊勢神宮他社寺建築で主に使用）・ｱﾒﾘｶ式長台刃幅60㎜での檜材削りを30人以上の方に体験して頂き、法隆寺を始めとした日本建築が、何故、此処まで長持ちしたのか参加者自ら削り、その肌に手で触れて、切れ味の素晴らしさを感じていただいた。

03 塩尻の木育推進がうまくいっている理由

塩尻商工会議所
総務課長 海津 健司

塩尻商工会議所及び実行委員会の取組みを紹介しながら、塩尻の木育の始まりから、木育フェスティバルの組織づくり、やり方、補助金を活用した事業展開等を、人とのつながりから塩尻の木育が進められていることを中心に説明した。
またウッドスタート宣言含め木育推進が大きく前進したエピソードや誕生祝い品のおもちゃの選考方法や実際使用された二人の木工作家のおもちゃ作り、ウッドスタート事業に対する思いについても話してもらい、ウッドスタートの素晴らしさも伝えることができたと思われる。
目的を持って参加して頂いていたので、参加者の真剣さが直接感じられ、その場で色々会話ができたのがとてもよかったと思う。私自身も経験してきたことを隠さず話したし、行政や関係者を動かす難しさを感じながらウッドスタート宣言に向けて頑張っている方々の、多少の勇気づけにはなったのかなと思っている。

04 全国の生産者による木育の取り組み

㈱土佐龍 池 龍昇社長、小岩商店 小岩 寛代表
㈱酒井産業 酒井 久徳専務・西片 睦実事務局長

25名の参加を頂き理事会から協議会活動パワーポイント映像を絡めた紹介を行い、理事及び会員の代表５工場から、原料である木材状況と開発商品の経過と紹介を行った。
事務局で副理事長の酒井産業から、木材の有効活用として、県産材に特化した活用事例１、長野県赤十字病院の室内「通路及び、小児科病棟の待合室、遊戯室の床や壁と大型木製遊具、ベンチなど」、２、松本空港「ボーディングブリッジやカウンターの木質化」、３、白馬五竜スキー場の親子広場「床、階段、大型遊具、カフェカウンターなど」、４、カーディーラーの親子遊び場として「大型遊具、商談カウンター、桧玉プールなど」や、全国各地の施設木質化事例報告。
林業家の山下木材、四万十桧利用工場の土佐龍、新潟の小柳産業、枡生産者の大橋量器、奈良の爪楊枝生産者の菊水産業が商品状況を報告した。
　参加者から、木育が子育てに効果が有り、社会生活に大きく貢献すると嬉しいご意見を頂きました。

05 塩尻市の保育園 木育の取り組みの紹介

掛川 佳子所長、大和 由理子園長
山本 厚一園長、小原（酒井産業）

保育に木育を取り入れている塩尻市内4箇所の幼保育園、保育施設の事例の紹介を行った。保育施設は木育のイベントや木育を通じた父親のコミュニティ作りを積極的に行っている。近場に自然が多い保育園では野外保育と同等の活動を、住宅街の保育園では木のおもちゃ（大量の板積木など）を活用して子供同士の社会性や運動機能の発達を促すような保育の報告であった。
参加者は真剣にメモを取っており、塩尻市の保育の独自性や木育の取り組みが先進的なことを実感できた。また、塩尻市主導ではなくてそれぞれの園独自の取り組みであることがポイントであったと考えられる。ただ、全体の時間が短くなってしまったことで、質疑応答の時間が取れず講師と参加者のコミュニケーションが取れなかったことが残念であった。

06 森林を利用した体験活動の具体例と簡易ツリーハウスつくりの実践

信州外あそびネットワーク代表
田口 眞嗣

森林を利用した代表的なこのツリーハウス作りの特徴は、シンプルな道具とシンプルな技術で簡単に基地が出来上がるという点である。参加者 の発想力を育て、木の特性や命の繋がりを理解し、森林での様々な目線での観察力を育めるのがこの体験の意図するところである。体験手法として『意外性』をよく活用するが、今回は荷紐という日常的に使う【強い】というイメージが薄いもので、充分な重力に耐えられるという点、また複雑だと思われるはしごやブランコの固定方法が実はとても簡単なロープワークで可能であるということを強調してワークショップを組み立てた。ツリーハウス＝秘密基地作りとして子供を対象とした体験活動では大変人気を呼んでいるアクティビティーである。参加者の皆さんは、簡単に作れること、想像以上に頑丈にできるということ、発展性に優れている活動であること、利用価値の薄い針葉樹と竹が主な道具であることに感心していたようである。約20分で2階建てブランコ、縄梯子付きツリーハウスが完成した。

07 木育おもちゃ産業プロジェクトについて

㈱Tree to Green 取締役
小瀬木 隆典

弊社で行ってきた事業活動における成功・失敗体験の紹介をした後、参加者全員で檜のブロックを紙やすりで磨きながら（檜の香りに包まれながら）、参加者の抱える課題を発表し合いディスカッションを行った。
参加者は、自治体やおもちゃ職人、地域おこしをされている団体など、おもちゃにかかわる方が中心で、おもちゃ作りにおける問題（職人のやる気、若手の不足）や、おもちゃを含む自社商品を売っていくことの難しさなどの課題が見受けられた。
皆自分たちの日本のものづくりについては自信をもっているので、海外を見据えた差別化やPR・販促、ユーザー目線の商品開発が今後の日本の木工においては重要だと再認識した。

08 ～森と生きる 森を生かす～塩尻市の森林再生へのチャレンジ

塩尻市役所 FPプロジェクト主任 小澤 亮
塩尻市役所 林業振興係長 西窪 美彦

塩尻市が主催したワークショップセッションでは、「～森と生きる　森を生かす～　塩尻市の森林再生へのチャレンジ」と題し、林業関係者や木材産業関係者、学生など、参加者約30人に向けて、森林資源を生かした本市のまちづくりについて報告を行った。後段の意見交換会では、参加者より、「林業分野にはまだまだ多くの障壁があり、多様な事業体が参入できるだけの環境が整っていない」との意見が多く出され、本市にとっても、今後の林業施策を構築していく上で、非常に参考となる意見や提言を得ることができた。
また、サミット終了後には、「本市の取組を、ぜひ、わが地域でも」と資料提供等を求める声が寄せられ、森林資源を生かしたまちづくりに向けた機運が、各地域で高まりつつあることを実感している。

ワークショップセッション

09 林業会社的木育事業報告会：リアルに都市住民と山をつなぐ「木育」

株式会社東京チェンソーズ
代表取締役 青木 亮輔

創業時より取り組んできた木育関連事業について報告。
当社の木育事業は大きく３段階に分かれている。
①効果が事業に直結。建築家や工務店を対象に、山林内での伐採・搬出現場、製材所、建築現場の見学ツアーを通じて、当社が扱う木の流れを可視化することで、地場産材のPRに繋げている。
②効果が中期的。「檜原村おもちゃビレッジ構想」について説明。地場産材を使った木のおもちゃの製造、販売することで、地域に新しい産業を作り出し、雇用に繋げることで、地場産材の活用範囲を広げたいと思っている。そのきっかけとして、ウッドスタート宣言から始まり、木育キャラバン、森のおもちゃ美術館の誘致活動などに取り組んでいる。
③効果が長期。会員制の森づくりプログラムである東京美林倶楽部（詳細はHP参照）やツリークライミングを紹介した。

10 「木育」による町おこしを。ウッド・スタート はじめませんか？

認定NPO法人日本グッド・トイ委員会
ウッドスタート事業部 遠藤 智史

主に自治体向けとして、ウッドスタート宣言までの事業の流れを解説した。必須項目となる誕生祝い品事業の説明では、地域材の調達の方法や、木工職人にいかにしておもちゃ作りに取り組んでいただくか、公認デザイナーがどのようにしてデザインを考案するか、他にも安全性の指針や検品方法などについて説明した。
全国のいくつかの地域をピックアップし、予算規模や工程の説明、２年目以降の取り組みについて事例紹介も行った。この事業を展開する上で、子育て支援と産業振興の２つのアプローチがあり、参加者からは「各自治体によってそのアプローチのどちらのメリットが強いのか見極めることが重要だ」という意見が出ていた。他にも、ウッドスタート宣言によって企業や大都市圏との連携の可能性や、「木育キャラバン」や「森のめぐみの子ども博」など各種イベントの紹介をした。木育の一つの行動プランとして本事業の可能性を大いに感じていただけた。

11 森と人とをつなげる人力の木工「グリーンウッドワーク」の可能性

NPO法人グリーンウッドワーク協会
理事長 小野 敦

グリーンウッドワークとは伐採したばかりの生木を、人力の道具を使って加工し、椅子や食器などをつくる、古くて全く新しい木工である。この日は、グリーンウッドワークとはどんなものか知っていただくために、パワーポイントを使ったプレゼンと、実演を行った。
まずは、丸太を割るところから開始し、普段は講座で6日間掛けてつくる木の椅子を、45分間で完成させるデモンストレーションを実施。
木を蒸して曲げる「曲げ木」や、手回しドリルを使った穴あけ、フレームの組み立てなどを行い、グリーンウッドワークの醍醐味を存分に味わっていただいた。希望者には、生木を削る体験をしていただき、より一層深くグリーンウッドワークについて理解を深めてもらった。
参加者の方からは、自らの木育活動にグリーンウッドワークの技術を取り入れたいといったお話も伺うことができた。

12 森を育てる・おもちゃを作る・木育を伝える「ぎふ木育」

岐阜県木育推進協議会
森田 展之

岐阜県木育推進協議会は全国でも珍しい様々なプロフェッショナルの集まりである。（子育て支援の関係者、トイコンサルタント、教授・学生、林業・製材業、木工家・デザイナーなど）生産者→作り手→伝え手、川上～川下の関係、連携が成り立っており、同じ志を持ち、同じ思いで木育の普及・こどもたちの笑顔・元気な森づくりを目指して取り組んでいる。
25年度に岐阜県が策定した岐阜県独自の木育の考え方、取り組み方の提案、活動の基本理念“ぎふ木育30年ビジョン”についての説明。岐阜県の豊かな自然を背景に、森や木とふれあい、学び、共生する文化を育て、自然を大切にする心を育み、次世代に豊かな自然とその心を段階的に、長期的につなげていくこと。その“ぎふ木育”の考えを基に開発してる県産材にこだわった“ぎふの木のおもちゃ”とこれまでの取り組み、岐阜県との協働活動を紹介。

13 信州型自然保育認定制度について

長野県県民文化部次世代サポート課企画幹
竹内 延彦

長野県が今年度創設した「信州やまほいく（信州型自然保育）認定制度」について、長野県の子どもを取り巻く現状や制度創設までの議論の経緯を含めて説明させていただいた。参加者は25名であった。当初の予定時間よりも短かったために時間内での質疑応答ができなかったが、制度のリーフレットをご覧いただきながら、自然保育の理念や活動内容、子ども達の育ちにおけるメリットなどを説明した。
セッション終了後に何人かの方から質問をいただいたが、「豊かな自然環境や多様な地域資源を活用した屋外を中心とする体験活動を積極的に取り入れた保育・幼児教育」という自然保育の理念にはいずれの方も賛同いただけたようで、一様に高い関心を示していただいた。長野県では、今後も自然保育の普及と充実により、子どもの自己肯定感の向上を目指していきたい。

14 長野スギダラ倶楽部

パワープレイス株式会社 シニアディレクター
若杉 浩一

「まなび」は素晴らしく、「遊び」は大切なものとして捉えられない。学びは遊びによって生命を与えられ、ワクワクするものにかわる。人は遊びによって学ぶ。危険や、勝敗や、理不尽の存在からたくさんのことを学ぶのである。しかし、教育では、この手のものは、排除される。しかし、現実は危険であり、不平等であり、理不尽が常態なのである。
木育とは、自然の循環、自然を生かしながら共に生きる、人間が、真実と向き合わなければならない。そして、「便利」「簡単」「安い」という価値観から、「誇り」「喜び」「愛着」という観念を持って、取り組まなければならない。
消費して、奪い合って生きるのではなく。豊かな社会を取り戻すための「運動」である。だから、木育とはそのような未来を思う様々な人たちが寄り添う。木育とは教育ではなく「まなび」と「あそび」を共に楽しむハイブリッドな未来への運動である。そう感じた、サミットだった。

参加者の「声」

信州型自然保育認定制度に参加しました。行政の中の、教育でも福祉でも林政でもない課が行っている事が新鮮でした。認可ではなく認証であり、「子ども達を森に返そう」「自然と地域の触れ合いを積極的に行おう」という、幼児教育や保育の現場の想いを後押しするものなのだと知りました。実施にあたり、先生や保育士の方々に「森のようちえん」の保育を見学してもらい、実際にどんな事が行われているか知る機会を作った事も、初年度に７２園もが認証を希望するに至った理由のひとつと思いました。規制をしたり枠にはめたりするのではなく、子どものためにやりたいと思う事をバックアップする信州型認定制度。子どもの豊かな時間のために行政の出来る事として、全国に広がって欲しいと思います。

塩尻の木育の特徴は、産学官民のバランスが取れた多様な業種による活動が展開できていることだと感じた。その大きな要因は、機動力のある商工会議所がコアとなって木育に取組んでいるからではないだろうか。インターンシップ学生とのコラボや、木のおもちゃの通信販売カタログ製作など、刺激的で大変参考になる話を聞くことができた。今後も「木育の街塩尻」から目が離せない。

Session I 「くらし」と木育

子どもにとって木はそれだけで十分な遊び相手になる存在です。触って楽しむもよし、登って眺めるもよし。木と共に過ごした記憶はいくつになっても忘れないものです。それが木の持つ不思議な魅力の源ではないでしょうか。大人にはそんな記憶をよみがえらせ、また子どもには新しい形での木とのかかわり方を提示する、そんなお話をしていただこうと思います。

座長：水谷 伸吉（一般社団法人more trees事務局長）

スピーカー紹介

赤峰 貴子

1990年株式会社良品計画入社。物流部門にて宅送システムの構築に参加後、1997年ISO担当、2003年広報室にて社内報を内製化。2004年CSRの企画推進を担当する環境広報担当課長を経て2011年9月に宣伝課長、2013年9月より販促業務を兼ねる現職就任。

長谷川 泰治

株式会社長谷萬代表取締役副社長。
前職ソニー株式会社にて国内外の工場にセル生産方式の導入を推進する「生産革新活動」に従事。平成21年に同社に入社。セル生産で学んだ「ニーズに合わせたもの作り」の思想を材木屋として具現化するため日々改善に取組んでいる。

椎川 忍

1953年生まれ。秋田県出身。東大法卒。1976年自治省入省、総務省自治大学校長、地域力創造審議官（初代）、自治財政局長などを歴任。2012年総務省を退官。2013年から地域活性化センター常務理事、2014年から理事長。

❖ 無印良品の木育への活動

赤峰 貴子氏（株式会社良品計画）

●環境広報の仕事を始めたときから、金井会長（現在）からガイドラインのない活動（自分の足で情報収集）するように意識づけられていた。
・そんな時に森林関係者の方から連絡があり、日本の森に関する現状を知った。
・社内で当時検討していた国産家具づくりで苦戦していたこともあり、森林問題への取り組みがなかなか進まない状況にあったが、たまたま金井会長が東京おもちゃ美術館を見に行ったときに、日本の木の利用に関するしっかりとした取り組みをしていることに感銘を受け、木育広場を設置する流れに進んでいった。
・有楽町本店では子どものあそび場の面積を狭めて店舗業績が悪化したタイミングとも重なったことから、逆に売り場面積を減らしてでも木育広場の面積を広くとるようにしたところ、客数が伸びた。
・子どもを連れて親がお店に来やすくなったことが木育広場の効果であり、また木の空間にすることでプラスチックやビニールのあそび場よりも子どもがじっくりと遊ぶことで親がくつろげることも大きいと思う。
・木育広場を全国の店舗に拡大するのと同時に、ワークショップの開催も積極的に行っている。
●木育の効果について、例えばセミナーなどのイベントを木の空間の中で開催すると、子どもが楽しむ姿を眺めつつ、親（父と母）とじっくりと意見交換することができると感じている。
●小売業とお客様という関係性でなくなる実感もあり、木の空間は人との距離を縮める効果があるのではないかと考えている。

❖「くらし」の中から伝える木育

長谷川 泰治氏（株式会社長谷川萬）

●長谷川萬治が95年前に東京都の木場に創業した材木問屋。現在は材木卸業以外にもプレカット材の製造やマンションリフォームなどを手掛けている。
●自身の前職はSONYで生産効率化を担う部門にいたこともあり、森林木工業におけるロス（端材）の多さには驚いた。端材利用がきっかけで木工教室を行い、次第に普及活動に力を入れるようになった。
●木工教室では簡単なものづくりでも十分に喜ばれることがかえって勉強にもなった。
●木育の効果について、端材を活用したワークショップから木の床にまで展開しており、CSRからCSVへの広がりということができるかもしれない。

❖ 地域おこしの支援と人材育成活動から見えてきたこと

椎川 忍氏（一般財団法人地域活性化センター）

●現役（総務省）時代にも地域力をどう伸ばすかについて検討と実践を重ねてきた。そのほとんどは人材力につきると考え、地域活性化センターを設立することとなった。
●東京おもちゃ美術館の多田館長とは3年前に出会った際に共鳴し合えたので、地域活性化センターが朝8時から民間の人も混ぜて開催している朝勉強会に来て講演してもらった。それからの縁。
●木育と囲碁は非常に相性が良いと思っていて、本来は難しいゲームである囲碁を簡単にすることで友達付き合いに悩む子どもや発達障害の子どもなどにも普及していきたいと考えている。
●木育の活動としてのメリットについて、プロダクトアウトやマーケットインの続くマーケティングモデルと呼ばれるカーブマーケティング的な活動と捉えられるのではないか。
●地域活性化センターは東京おもちゃ美術館との協定を結び、ウッドスタート宣言を都道府県で最低1自治体は行うような仕組みづくりを一緒に進めていきたいと考えている。
●地域のなかでも木育の広がりについて格差がある。消費地である都市部においてどのように木育を取り入れるかが今後のポイントだと思う。

「木育」という言葉について

赤峰氏
●木育は座学ではなく、自然の中に自分を置くような環境づくりを通じて、自然に身につくものだと思う。
●過去に会社が業績悪化に陥ったときには、店舗内装をフォーマット化して効率的に作るような動きもあったが結果長続きしなかった経験からも、環境づくりは重要と考えている。
●家族も森林でのキャンプが好きでそのような体験を重ねることは子育てにとっても良い効果があるように思う。

長谷川氏
●子どものうちから木育活動をすることは、その子どもが大人になっても森林を大事にすることにつながると思う。
●公教育のなかに取り入れられても良いのではないか。

椎川氏
●縄文文化が世界中で評価され始めている。それは森の中で暮らしながらも木を伐って開拓するのではなく森林と共生し、かつ人間同士の争いもなかったからである。
●日本人の中に埋もれつつある、森林の中で暮らすDNAを呼び戻す活動が木育であり、少し大げさに言えば世界中で起きている争いに対する解決にもなるのではないか。

Session Ⅱ 「まなび」、「あそび」と木育

木の働きの一つには集中力を高める、というものがあります。思えば昔から学びの場には木が溢れていたものです。それが時代の流れにのまれ姿を消しつつありましたが、最近になってまた木の香りが蘇りつつあります。そこでここでは再び「まなび」と「あそび」の場に木薫る風を吹かせるため、その現場の最前線に立つ方々にその可能性を語っていただきます。

座長：多田 千尋（認定NPO法人日本グッド・トイ委員会理事長・東京おもちゃ美術館館長）

❖ 日本全国スギダラケクラブの活動

若杉 浩一氏（パワープレイス株式会社）

- 2002年にスギダラケ倶楽部を立ち上げ、現在までに1990名の会員と全国18支部になるまでの広がりを見せるようになった。
- 企業のインハウスデザイナーとして仕事をする中で企業とは、デザインとは何かについて深く考えさせられるようになった。
- スギダラケ倶楽部での活動を通じてデザインは経済のためにあるのではないという実感をますます深めている。以下はこれまでの実績の一部。・宮崎県日南市の駅舎PJ・無印良品の木育広場PJ・函館空港のHakoDake PJ
- 消費者の価値観が産業的な安くて簡単・便利というから、高い・面倒（喜び・感謝・誇り）…というものにシフトしつつあるように感じている。
- これまで感じた木育普及の課題としては、①木製品を国産材にする中で規格（JIS）への対応と、②社内における理解の浸透があげられる。
- 学童デスクを地域材で作るプロジェクトを手掛けた際には強度と価格の課題があった。
- 今後もスギダラケ倶楽部の1990名の仲間との心震える取組、日本人の魂につながる運動ともいうべき活動を続けることが、毎日を楽しくし、くらしを素敵にすると信じている。特に自身としてはデザインそのものの価値を高めていきたい。

❖ 木質化された空間が、子どもに与える様々な効果

浅田 茂裕氏（埼玉大学）

- 埼玉大学では木の効能について、特に公教育現場での効能について研究している。
- あいまいな形がもつ良さがあり、子どもには見立て遊びが可能になる。
- 木には地と模様と木目がある。
- 木材の空間にいると子どもの遊びが長く続く、集中して遊ぶ。
- 木育には子育て中の母親に対しても人間形成機能・文化形成機能・環境形成機能がある。
- 木づかい子育てネットワークでウッドファースト活動を進めており、今年の2月には第1回木育森育楽会を行った。
- 教育課程において木育を入れることは、基礎学力としての必要性は感じるが、学科として義務化するのは必要ないではないかと考える。
- 木育は"運動"で良いのではないだろうか。
- 今後は多様な木育を創り出し、木育という言葉自体をなくすことが究極的な目標だと思う。

スピーカー紹介

若杉 浩一

パワープレイス株式会社シニアディレクター。プロダクトデザイナー。1984株式会社内田洋行入社、デザイン、製品企画、知的生産性研究所。テクニカルデザインセンターで製品開発と研究開発を行い、現在、内田洋行のデザイン会社であるパワープレイスにて、ITとデザインのメンバーを集めリレーションデザインセンターを設立し事業化を志す。

竹内 延彦

1967年長野県東部町(東御市)生まれ。臨床心理学を学ぶ大学院時代に都内のフリースクールスタッフとなり、企業とＮＰＯ法人を経て現在は公務員に。立場は変わっても、四半世紀の間一貫して子ども若者支援に取り組む。

浅田 茂裕

埼玉大学教育学部教授（生活創造講座）、NPO法人木づかい子育てネットワーク理事長、木育野郎。1966年熊本県生まれ。鹿児島大学を経て九州大学大学院修了。埼玉大学教育学部に着任。現在に至る。

❖ 長野県の木育活動

竹内 延彦氏（長野県県民文化部次世代サポート課）

- 信州型自然保育認定制度を創設した。現在までに14市町村72園に広がった。
- 自然保育自体は珍しいものではなく、森のようちえんは県内に16箇所ある。
- 自然保育に対して前向きな公立・私立の保育園等を認証して、県でPRや集合研修等サポートを行う。
- 保育体験の共有も重要。これまでの各園の自然保育の取り組みを園内だけで完結させるのではなく、共有することで質の向上／担保を図りたい。
- これまでに感じた推進上の課題としては、県が認定するというスキームの意義を自治体や保育園等に理解してもらうことに苦労した。
- 平成26年度に検討委員会を立ち上げた時点では半年程度で認定制度をスタートさせる予定だったが、実際には1年のすべてを議論に費やしてしまった。
- 理解がなかなか得られない検討委員については自然保育の現場まで個別に連れていくことで理解を得るように努めた。
- これまでの自身の経歴のなかでは、フリースクールのスタッフ・高卒生の自立支援など、学校制度の外にいる子どもたちと触れ合ってきた。現在の学校制度の課題解決に向けて、自然体験と保育や教育をつなげる活動を今後も行っていきたい。

❖ ゲストよりメッセージ ～クロージングセッション～

山下 晃功（島根大学 名誉教授）

初の地方開催

- 全国のなかでも有数の木育推進自治体である塩尻市において木育サミット初の地方開催が行われたことは非常に意義深いと思う。
- 今回で第3回となる木育サミットは回を重ねるごとに盛り上がってきていると感じている。
- 地方創生は沿岸都市において進みつつあるが、これからは山林が地域を盛り上げる起爆剤となるような時代になるのではないかと期待している。
- 次回の木育サミットは東京の江東区木場が舞台になる。日本の森林業・木材業の中心地である木場の地で、これから一年間の木育推進の活動をぜひ報告し合いたい。

参加者の「声」

- 「子どもも大人も、もっと山や森に親しめたらいいのに」「日本の木をもっと生活に取り入れられたらいいのに」こんなことを漠然と願っている人は少なくないと思います。木育サミットでは、そのための具体的な活動の数々を知ることができ、希望を感じました。森を作る人、子どもに関わる人、木の文化を受け継ぐ人、様々な分野の人が集まっていたのも、まるで森の中に多様な動物や昆虫や植物が寄り集まっているようで素敵でした！
- 今回初めて参加しましたが、木曽漆器の産地である塩尻市での開催は大変意義のあることだったと思います。地域の木に関わる方に大きな刺激を与えると思いますので、今後も、林業地や家具産地等での開催を期待します。C.W.ニコルさんのお話からは、森が持つ癒しの力を改めて感じました。誰もが子どもの頃から自然を体験できる環境があるとよいと思います。
講師と参加者から、様々な話を聞き、今後の活動に向けてヒントが得られました。

❖ 当日プログラム

10:00

開会挨拶

主催者挨拶：多田 千尋（東京おもちゃ美術館館長）
開催地代表挨拶：小口 利幸（塩尻市長）
実行委員長挨拶：山田 正治（塩尻商工会議所会頭）

▼

10:15

基調講演

今井 敏（林野庁長官）

▼

10:30

特別講演

「心に木を植える」C.W.ニコル（作家・ナチュラリスト）

▼

11:30

ワークショップセッション

12:30　**昼食・休憩**

13:30

セッションⅠ：「くらし」と木育

赤峰 貴子（株式会社良品計画）
長谷川 泰治（株式会社長谷萬 副社長）
椎川 忍（一般財団法人地域活性化センター 理事長）
座長：水谷 伸吉（一般社団法人モア・トゥリーズ 事務局長）

▼

15:00

セッションⅡ：「まなび」、「あそび」と木育

若杉 浩一（パワープレイス株式会社 シニアディレクター）
竹内 延彦（長野県県民文化部次世代サポート課 企画幹）
浅田 茂裕（埼玉大学教育学部 教授）
座長：多田 千尋（東京おもちゃ美術館 館長）

▼

16:15

クロージング

総括：山下 晃功（島根大学 名誉教授）

16:30　**終了**

東京おもちゃ美術館の木育推進支援

全国の自治体が、企業が、声高らかに「ウッドスタート宣言」

ウッドスタート活動では、「木」を真ん中に置いた子育て・子育ち環境の整備をし、子どもをはじめとする全ての人たちが、木のぬくもりを感じながら、楽しく豊かに暮らしを送ることができるようにしていく取り組みです。
全国の自治体向けには、生まれた赤ちゃんに地産地消の木製玩具を誕生祝い品としてプレゼントする事業や、子育て環境に地域材をふんだんに取り入れ、木質化・木育化する事業など、計6項目を展開しています。

ウッドスタート事業 6項目

誕生祝い品事業
地産地消の木のおもちゃを新生児にプレゼントします。

木育キャラバンの開催
素晴らしい木のおもちゃとの出会いの場を作ります。

木育インストラクター
地域で木育推進のリーダーとなる人の養成。

木育円卓会議の開催
地域の木育推進をみんなで語り合う場を設けます。

子育てサロンの設立
地域材を活用した木質感あふれるサロンを整備します。

おもちゃ美術館の設立
東京おもちゃ美術館の姉妹館を設立します。

木育サミット

木と共に生きていく「木育」の活動を、多くの人に関心を持ってもらうために、定期的に開催されるサミットです。企業、自治体などからさまざまな方が登壇し、未来の「木のこと森のこと」について語り合います。

木育ラボ

木育活動を全国各地に発信していくためのサイトです。このサイトを中心に全国の木育活動をしている組織、団体を結びつけ、より強固な木育ネットワークの構築をめざして活用していきたいと考えます。

ウッドスタート宣言企業

ウッドスタートを導入するのは、自治体のみならず、企業・団体にも広がりを見せています。誕生祝い品の導入、保育園の内装木質化などさまざまな方法で「木育」が広がっています。

- 株式会社良品計画
- 株式会社長谷萬
- 株式会社内田洋行
- パルシステム東京
- パルシルテム生活協同組合連合会
- 株式会社こうゆう・花まる学習会
- サクセスホールディングス株式会社
- 認定NPO法人フローレンス
- インフォテリア株式会社
- 認定NPO法人NEXTEP（ネクステップ）
- 株式会社GRIP'S（グリップス）
- パルシルテム神奈川ゆめコープ
- タマホーム株式会社

ウッドスタート宣言市町村 ※2015年12月現在。2016年度以降に宣言予定の市町村も含む

ウッドスタートモデル園

木のぬくもりをふんだんに感じられる環境で子どもたちが過ごせるように、地域材を活用した「園舎の木質化」に取り組んでいる子育て施設です。

- 美濃保育園（岐阜県）
- 下牧保育園（岐阜県）
- グリーンヒル幼稚園（東京都）
- やまなみ保育園（福井県）
- チューリップ保育園（福井県）
- めぐみこども園（福井県）

MOKUIKU summit 2016

VEGETABLE OIL INK

間伐は みどりを育てる 深呼吸

当冊子は環境に配慮した「ベジタブルインキ」と
間伐材を原料として使用した「間伐材紙」で作られています。

主催紹介

東京おもちや美術館

東京おもちゃ美術館は、おもちゃを手にとり、触れて、遊ぶことができる体験型の美術館です。
手作りおもちゃを作ることができる「おもちゃ工房」や、季節のイベントなど、子どもだけではなく、大人も赤ちゃんも多世代で楽しめる、さまざまなコンテンツを取り揃えております。
また、国産の木材のみで作られた「おもちゃのもり」や、赤ちゃんが木の匂いや触り心地をふんだんに感じられる「赤ちゃん木育ひろば」など、木育にふさわしいコンテンツを多数そろえております。

〒160-0004 東京都新宿区四谷4-20 四谷ひろば内
tel: 03-5367-9601 fax:03-5367-9602
http://www.goodtoy.org/ttm

INFORMATION

木育情報のポータルサイト 木育ラボ

これまでの木育活動は、さまざまな団体がそれぞれ取り組みをしてきました。そこで、こうした素晴らしい活動をしている方々の取り組みを紹介し、全国各地に発信していくためのサイトが「木育ラボ」です。
今後は、このサイトを中心に全国の木育活動をしている組織、団体を結びつけ、より強固な木育ネットワークの構築をめざして活用していきたいと考えています。

http://mokuikulabo.info/ 木育ラボ 検索